I Kings 2:1-46

2章

テーマ:ダビデの死の床でのソロモンに対する遺言と、ソロモンの治世の始め。
この章には、ダビデの死の前の、ソロモンに対する最後の指示と、ダビデの願いをソロモンが賢く実行に移したことが記録されています。

ダビデの、ソロモンへの遺言

(I 列王記2:1ー2)「ダビデの死ぬ日が近づいたとき、彼は息子のソロモンに次のように言いつけた。『私は世のすべての人の行く道を行こうとしている。強く、男らしくありなさい。』」
最初にダビデは言いました。
「私は世のすべての人の行く道をいこうとしている。」
これが人の道です。ローマ人への手紙5:12で、使徒パウロは言っています。

(ローマ5:12)「そういうわけで、ちょうどひとりの人によって罪が世界に入り、罪によって死が入り、こうして死が全人類に広がったのと同様に、──それというのも全人類が罪を犯したからです。」

ひとりの人によって死が入りました。そして死はすべての人に引き継がれました。なぜなら、すべての人が罪を犯したからです。アダムの罪はあなたや私に伝えられました。もし、主が遅れたなら、私たちは死の門をくぐらなければならないのです。なぜでしょう?なぜなら、これがすべての人の行く道なのです。この人生の旅路の締めくくりです。これはあまり魅力的な話題ではありません。今日私たちは、死について考えることを好みません。なぜなら、この話題は人類にとって、あまりにも憂うつなことだからです。
詩篇23:4で、ダビデは言っています。

(詩篇23:4)「たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れません。あなたが私とともにおられますから。あなたのむちとあなたの杖、それが私の慰めです。」

ダビデは、自分が死の床にいるという事実には触れてはいません。
「いのちが与えられた瞬間に、死もまた始まるのである」
と誰かが言いました。ダビデは人生を谷を歩くことになぞらえています。生まれたときに、その谷を通って歩き始め、先へ行くに連れて、その谷は狭くなるのです。その谷の終わりには、死が待っています。私たち全ては、今日その谷を通って歩いているのです。あなたは今日、元気一杯かも知れませんが、日が沈む前に死ぬかもしれないのです。
次にダビデはソロモンに言います。「強く、男らしくありなさい。」主イエス・キリストは、バプテスマのヨハネに会いに来た群衆に、次のように言われました。

(マタイ11:8)「でなかったら、何を見に行ったのですか。柔らかい着物を着た人ですか。柔らかい着物を着た人なら王の宮殿にいます。」

バプテスマのヨハネは、荒野で育ちました。彼は頑健でした。主も頑健な男性でした。私は主を描いた絵は、好きではありません。なぜなら、画家たちは主をほとんど女性的にしてしまっているからです。ただ、最近の絵では、主をもっと男性的に描こうとしてはいるようです。もしこの地上を歩かれたときに主を見ることができたなら、あなたが見るのは頑健な男性だったのです。主の手には、たこができていました。 主は大工でしたから。主は神さまでしたが、本当の人でもありました。主はまことの人よりのまことの人、まことの神よりのまことの神である方でした。(訳注:ニケア信条の中の一文と思われます)
ソロモンは、彼の父とあまり似てはいませんでした。ダビデは男らしい人でした。ソロモンはそれほど男らしくはありませんでした。ダビデは頑健でした。ソロモンは宮殿で育ちました。事実、彼は女性たちの宮廷で育てられたのです。なぜソロモンは1000人もの女性たちをまわりにはべらせたのでしょう?その答えは、

とても明らかです。ソロモンが知っていることの全ては、女性についてでした。彼は確かに女性的でした。ダビデとソロモンは、あまり共通点がなかったのではないかと思います。そこでダビデは彼に言いました
「私がお前を王にしたのだ。男らしくふるまいなさい。お前は男らしいとは思わないが、できるだけベストを尽くしなさい。」
これはダビデが、柔らかい着物を着て育てられたこの若者に与えた勧告です。ソロモンはダビデのようではありませんでした。彼はバプテスマのヨハネのようでもありませんでした。彼は主とも違っていました。でも今、彼はイスラエルの王になりました。

(Ⅰ列王記2:3－4)「『あなたの神、【主】の戒めを守り、モーセの律法に書かれているとおりに、主のおきてと、命令と、定めと、さとしとを守って主の道を歩まなければならない。あなたが何をしても、どこへ行っても、栄えるためである。そうすれば、【主】は私について語られた約束を果たしてくださろう。すなわち「もし、あなたの息子たちが彼らの道を守り、心を尽くし、精神を尽くして、誠実をもってわたしの前を歩むなら、あなたには、イスラエルの王座から人が断たれない。」』」
ダビデはソロモンが主と神さまのみことばにいつも近くあるようにと奨励します。この若者に対するダビデのアドバイスはとても重要です。
　ダビデがソロモンに残した遺産については、ほとんど注目されることはありません。でも、ダビデが残したものによって、ソロモンはこの地上の偉大な王たちのひとりになれたのだと、私は信じています。事実ソロモンは、おそらく今までに生きた(歴史的な)王たちの中で、最もよく知られているひとりでしょう。
　イーソン(J.Lawrence Eason:？－？)は著書"新聖書概観(New Bible Survey)"(ゾンダーバン出版)の中で、ダビデがソロモンに残した遺産を列挙しています。

　1. "ダビデは、国のリーダーシップをサウルの家とベニヤミン族からユダに移し、ダビデの王家を確立した。"
　新約聖書に行くと分かりますが、これはとても大切なことになってきます。マタイの福音書は、次のことばで始まります。

　(マタイ1:1)「 アブラハムの子孫、ダビデの子孫、イエス・キリストの系図。」

そして、ルカの福音書1:31－32では天使ガブリエルがマリヤに言いました。

　(ルカ1:31－32)「ご覧なさい。あなたはみごもって、男の子を産みます。名をイエスとつけなさい。その子はすぐれた者となり、いと高き方の子と呼ばれます。また、神である主は彼にその父ダビデの王位をお与えになります。」

ダビデの子孫だけが、イスラエルの王座をしめるべきなのです。

　2. "ダビデは、エルサレムを聖なる都として確立し、宗教的な中心、そしてすべてのユダヤ人のための国の首都とした。"
　これは、今日まで続いています。イスラエルが1967年の六日戦争でエルサレムをアラブ人から取ったとき、彼らは、この町を放棄するつもりは全くないことを宣言しました。なぜなら、この町はダビデまでもさかのぼる遺産だからです。エルサレムはダビデのお気に入りの町で、彼がエルサレムをイスラエルの国の首都としたのです。ソロモンが、神殿を建てて町を美しくし、イスラエルの宗教的な中心地としました。でも、神殿の準備をしたのはダビデであることに注目しなければなりません。

　3. "ダビデは、事実上偶像礼拝を根絶し、エホバを礼拝することをこの地で普遍的なものとした。"
　これは彼のもっとも重要な貢献です。

　4. ダビデは多くの国を征服し、それらの国々はイスラエルとその王にみつぎを払いました。

“ダビデは国の境界線を、南はエジプト、北と東はユーフラテス川まで拡張した。”
実際、ダビデはそれ以前と、またそれ以後のどのときよりもイスラエルの境界線を広げた人物です。ソロモンの統治の間に平和がかなったのは、ダビデがイスラエルの敵たちを服従させたからなのです。

5. かなりの大きさのハーレムを持つ東方の君主ではありましたが、
“ダビデの外国人たちとの婚姻は、おもに政治的なものであり、宗教的、道徳的な退廃はあまりなかった。”
ハーレムを持つことは当時の習慣でしたが、神さまはダビデの大ぜいの妻たちを認めてはおられませんでした。そして、多くの場合その妻たちのせいで、彼はいつも困ったことに巻き込まれました。これらの妻たちによって彼に生まれた大ぜいの息子たちは、宮廷の中で絶え間ない紛争を引き起こしました。そのことは、ダビデにとって、生涯の間深い悲しみと苦難になりました。外国人の妻たちに影響を受けたのは、ダビデではなくソロモンでした。ダビデがとんでもない罪を犯したのは本当ですが、それは彼がバテ・シェバと結婚する“前”に起こったことでした。そのあとには、スキャンダルのかけらも起こってはいません。

6. ダビデは詩人であり、民に「イスラエルの麗しい詩篇記者」として愛されました。彼は少なくとも73篇の詩篇を残しています。

7. “ダビデは神殿を計画した。”
彼は主の家を建てることを許されはしませんでしたが、この神殿は、国の宗教生活とエホバに対する礼拝を高めるためのものでした。

8. 北の諸部族と、南のユダとベニヤミンの間にはまだある種のライバル意識がありました。この意識はサウルとヨナタンが死んでからずっとあったものでした。それでも、
“すべての部族をダビデの支配の下に統一する”
こととエルサレムを国の首都にすることには深刻な困難はありませんでした。

9. ダビデが死ぬとき、イスラエルは並びない“権力と軍事能力”を持っていました。そして民は大きな平和と自由を持ち、ひとりひとりが

（I 列王記4：25）「みな、おのおの自分のぶどうの木の下や、いちじくの木の下で安心して住むことができた」

のです。ソロモンが自分の治世の間に平和に恵まれたのは、ダビデによって、彼の治世の間に平和が作り出されたからでした。

（I 列王記2：8－0）「『また、あなたのそばには、バフリムの出のベニヤミン人ゲラの子シムイがいる。彼は、私がマハナイムに行ったとき、非常に激しく私をのろった。しかし、彼は私を迎えにヨルダン川に下って来たので、私は【主】にかけて、「あなたを剣で殺さない」と言って彼に誓った。だが、今は、彼を罪のない者としてはならない。あなたは知恵のある人だから、彼にどうすれば彼のしらが頭を血に染めてよみに下らせるかを知るようになろう。』」
ダビデはここでなにか復讐心に見えるようなものを示していますが、実際はそうではありません。シムイは自分が裏切り者であることを実践しましたが、ダビデが彼を殺さないと誓ったので、まだ生きていました。ダビデは自分のことばを守る人物でした。でも今、ダビデはソロモンに注意深く彼を見ているように、そしてもし彼が裏切り行為のかけらでも見せたなら、ソロモンはそのように彼を扱うように、と命じます。ついでながら、ソロモンがシムイを扱うときがきますが、それはシムイがそむいて確かに裏切り者であることを示した後のことです。

ダビデの死

（Ⅰ列王記2：10－12）「こうして、ダビデは彼の先祖たちとともに眠り、ダビデの町に葬られた。ダビデがイスラエルの王であった期間は四十年であった。ヘブロンで七年治め、エルサレムで三十三年治めた。ソロモンは父ダビデの王座に着き、その王位は確立した。」
ダビデの死には、悲しい調べがあります。彼は偉大な神の人でした。ダビデとバテ・シェバの最初の息子のことを覚えておられますか？その子は生まれて数日で亡くなりました。ダビデはその子のことをこう言いました。
「あの子が私のところに戻ってくることはないが、私が彼のところに行く。」
今ダビデはその子といっしょにいるために世を去りました。
　彼の父親が亡くなったので、ソロモンは王位につきました。王朝や支配者が交代するとき、そこにはいつでも混乱と大きな変化のときが起こります。

ソロモンの即位

（Ⅰ列王記2：13－14）「あるとき、ハギテの子アドニヤがソロモンの母バテ・シェバのところにやって来た。彼女は、『平和なことで来たのですか』と尋ねた。彼は、『平和なことです』と答えて、さらに言った。『あなたにお話ししたいことがあるのですが。』すると彼女は言った。『話してごらんなさい。』」
今、ソロモンが王位についたにもかかわらず、アドニヤはまだ王になりたいという考えを捨ててはいません。彼はまだこの考えを持ちながらバテ・シェバのところにやって来ます。彼女はあまり彼を信用しておらず、彼が何で来たかを訊ねます。彼は平和なことで来た、と言います。彼女は「話してごらんなさい」、つまり「私は聞いていますよ」と言います。

（Ⅰ列王記2：15）「彼は言った。『ご存じのように、王位は私のものであるはずですし、すべてのイスラエルは私が王となるのを期待していました。それなのに、王位は転じて、私の弟のものとなりました。【主】によって彼のものとなったからです。』」
彼は、自分はソロモンよりも人気があって、民は自分を王にすることを望んでいた、と言っています。

（Ⅰ列王記2：16－17）「『今、あなたに一つのお願いがあります。断らないでください。』彼女は彼に言った。『話してごらんなさい。』彼は言った。『どうかソロモン王に頼んでください。あなたからなら断らないでしょうから。シュネム人の女アビシャグを私に与えて私の妻にしてください。』」
彼は言っています。
「王国は私の手から奪われましたから、私は、ただひとつ、小さなお願いがあります。アビシャグを私の妻に欲しいのです。」
覚えておられるでしょう。アビシャグは、ダビデの最期のとき、彼を介護した女性です。

（Ⅰ列王記2：18－21）「そこで、バテ・シェバは、『よろしい。私から王にあなたのことを話してあげましょう』と言った。バテ・シェバは、アドニヤのことを話すために、ソロモン王のところに行った。王は立ち上がって彼女を迎え、彼女におじぎをして、自分の王座に戻った。王の母のためにほかの王座を設けさせたので、彼女は彼の右にすわった。そこで、彼女は言った。『あなたに一つの小さなお願いがあります。断らないでください。』王は彼女に言った。『母上。その願い事を聞かせてください。お断りしないでしょうから。』彼女は言った。『シュネム人の女アビシャグをあなたの兄のアドニヤに妻として与えてやってください。』」
これは無礼な願いではありましたが、アドニヤはソロモンが自分の母には何も拒むことはないと知っていました。だからこそアドニヤは直接ソロモンのところに行かずに、バテシェバのところに行ったのです。

（Ⅰ列王記2：22－23）「ソロモン王は母に答えて言った。『なぜ、あなたはアドニヤのためにシュネム人の女アビシャグを求めるのですか。彼は私の兄ですから、彼のために、王位を求めたほうがよいのではありませんか。彼のためにも祭司エブヤタルやツェルヤの子ヨアブのためにも。』ソロモン王は【主】にかけて誓って言った。『アドニヤがこういうことを言って自分のいのちを失わなかったら、神がこの私を幾重にも罰せられるように。』」

アドニヤは実際、王座へに向かって近づこうとしていました。彼はとても危険なことをしていましたが、そのすべてのことについて、とても巧妙でした。アドニヤはソロモンの兄でしたし、もちろんソロモンは、ダビデが後継者を指名する前に兄が王座を奪おうとして動いたことに気づいていました。バテ・シェバは無邪気にも、アドニヤがアビシャグを求めるのはもっともなことだと感じましたが、ソロモンは鋭い理性で、悪巧みをすぐさま見通しました。

（Ⅰ列王記2：24－25）「『私の父ダビデの王座に着かせて、私を堅く立て、お約束どおりに、王朝を建ててくださった【主】は生きておられる。アドニヤは、きょう、殺されなければなりません。』こうして、ソロモン王は、エホヤダの子ベナヤを遣わしてアドニヤを打ち取らせたので、彼は死んだ。」
もちろんアドニヤの死は残虐ですが、彼の死によって王位に対する挑戦者はいなくなりました。ソロモンの王位を確立するためには、彼を処刑することが必要でした。アドニヤが生きている限り、彼は王位を奪おうとして続けて共謀し、企んだことでしょう。
　さて、アドニヤを取り除いた今、ソロモンはアドニヤを支持した者たちを影響力のある地位から降ろすことが必要であることに気づきます。

（Ⅰ列王記2：26－27）「それから、王は祭司エブヤタルに言った。『アナトテの自分の地所に帰りなさい。あなたは死に値する者であるが、きょうは、あなたを殺さない。あなたは私の父ダビデの前で神である主の箱をかつぎ、父といつも苦しみを共にしたからだ。』こうして、ソロモンはエブヤタルを【主】の祭司の職から罷免した。シロでエリの家族について語られた【主】のことばはこうして成就した。」
アロンの子孫であるエブヤタルは、祭司の職から罷免され、恥辱のうちに自分の地所に返されました。なぜなら、彼はアドニヤの謀反に参加したからです。彼が処刑されなかった唯一の理由は、アブシャロムの謀反のときに彼がダビデに忠誠を尽くしたからでした。これで、エリの家系は終わりました。

（Ⅰ列王記2：28－30）「この知らせがヨアブのところに伝わると、──ヨアブはアドニヤについたが、アブシャロムにはつかなかった──ヨアブは【主】の天幕に逃げ、祭壇の角をつかんだ。ヨアブが【主】の天幕に逃げて、今、祭壇のかたわらにいる、とソロモン王に知らされたとき、ソロモンは、『行って、彼を打ち取れ』と命じて、エホヤダの子ベナヤを遣わした。そこで、ベナヤは【主】の天幕に入って、彼に言った。『王がこう言われる。「外に出よ。」』彼は、『いやだ。ここで死ぬ』と言った。ベナヤは王にこのことを報告して言った。『ヨアブはこう言って私に答えました。』」
エブヤタルとアドニヤに何が起こったかを聞いたとき、ヨアブは大樹の陰に頼りました。彼は主の会見の天幕に逃げ、聖所の祭壇の角をつかみました。ソロモンは、エホヤダの子ベナヤを、ヨアブの処刑者に選びました。彼はヨアブのあとを追って行き、会見の天幕から出てくるように頼みました。ヨアブはそれを拒否して、言いました。
「私は死ななければならないなら、ここで死ぬ。」

（Ⅰ列王記2：31－32）「王は彼に言った。『では、彼が言ったとおりにして、彼を打ち取って、葬りなさい。こうして、ヨアブが理由もなく流した血を、私と、私の父の家から取り除きなさい。【主】は、彼が流した血を彼の頭に注ぎ返されるであろう。彼は自分よりも正しく善良なふたりの者に撃ちかかり、剣で彼らを虐殺したからだ。彼は私の父ダビデが知らないうちに、ネルの子、イスラエルの将軍アブネルと、エテルの子、ユダの将軍アマサを虐殺した。』」
ヨアブは血まみれの男でした。

（Ⅰ列王記2：33－34）「『ふたりの血は永遠にヨアブの頭と彼の子孫の頭とに注ぎ返されよう。しかし、ダビデとその子孫、およびその家と王座にはとこしえまで、【主】から平安が下されよう。』エホヤダの子ベナヤは上って行って、彼を打ち取った。彼は荒野にある自分の家に葬られた。」
ヨアブは、ソロモンに対する謀反に加担したために、処刑されました。

シムイはもうひとりの裏切り者です。ダビデは彼に手を下しませんでした。なぜなら、彼を殺さないといって誓ったからです。今、ソロモンはシムイに制限を加えます。

（Ⅰ列王記2：36）「王は人をやって、シムイを呼び寄せ、彼に言った。『自分のためにエルサレムに家を建てて、そこに住むがよい。だが、そこからどこへも出てはならない。』」
ソロモンは、自分の目の届くところにシムイを置いておきたかったのです。シムイは行く先々に謀反の種をまいて来ました。ソロモンは彼の一挙手一投足を見ておきたかったのです。

（Ⅰ列王記2：37－38）「『出て、キデロン川を渡ったら、あなたは必ず殺されることを覚悟しておきなさい。あなたの血はあなた自身の頭に帰するのだ。』シムイは王に言った。『よろしゅうございます。しもべは、王さまのおっしゃるとおりにいたします。』このようにして、シムイは長い間エルサレムに住んだ。」
ソロモンはシムイに、エルサレムに家を建て、町囲みの中にとどまりなさいと命令します。彼は帰って自分の部族とともに住むことを禁じられました。シムイはソロモンの条件に従うことを約束しました。

（Ⅰ列王記2：39－40）「それから、三年たったころ、シムイのふたりの奴隷が、ガテの王マアカの子アキシュのところへ逃げた。シムイに、『あなたの奴隷たちが今、ガテにいる』という知らせがあったので、シムイはすぐ、ろばに鞍をつけ、奴隷たちを捜しにガテのアキシュのところへ行った。シムイは行って、奴隷たちをガテから連れ戻して帰って来た。」
シムイは町囲みから外に出ました。ソロモンの命令に対する直接の不従順でした。ソロモンに、シムイが何をしたかが知らされました。そこで王は彼に使者を送りました。

（Ⅰ列王記2：43－46）「『それなのに、なぜ、【主】への誓いと、私があなたに命じた命令を守らなかったのか。』王はまた、シムイに言った。『あなたは自分の心に、あなたが私の父ダビデに対してなしたすべての悪を知っているはずだ。【主】はあなたの悪をあなたの頭に返されるが、ソロモン王は祝福され、ダビデの王座は【主】の前でとこしえまでも堅く立つであろう。』王はエホヤダの子ベナヤに命じた。彼は出て行って、シムイを打ち取った。こうして、王国はソロモンによって確立した。」
シムイの死によって、自分の父、ダビデの遺言をなしとげました。ソロモンはほとんどの王座に挑戦する者たちを取り除きました。今彼は、平和のうちに統治することが出来ます。